

シーニックバイウェイHOKKAIDOが地域住民のまちづくりや景観意識に与える効果*

The Effect of Scenic Byway HOKKAIDO on Residents' Sense of Regional Planning and Landscape *

石田東生**・小川華奈***・堤盛人****

By Haruo ISHIDA **, Kana OGAWA *** and Morito TSUTSUMI****

1.はじめに

北海道において 2005 年度からのシーニックバイウェイ HOKKAIDO(以下 SBH)制度¹⁾の本格導入に向けて、2003 年度から 2004 年度の 2 年間に渡りモデル事業が行われた。本制度は様々な主体や広域での協働、美しい景観づくりを目指しており、新たな地域住民参画型・様々な主体による連携型のみちづくりとして注目され、今後他の地域にも広がっていくと考えられる。本制度により、美しい道の実現や地域の活性化など目に見える効果と参加主体である人の意識に対する効果が期待される。

まちづくりや景観形成においては、自然環境や施設など地域が保有する資源だけではなく、地域住民の意識も重要な要因や要素となる。したがって、地域住民の意識が向上すれば美しい道の実現などに繋がる可能性がある。

そこで本研究においては SBH 制度の効果の一つとして地域住民の意識に与える効果に着目する。具体的には、モデル事業による地域住民の意識変化を把握・計測することにより、地域住民の意識にどのような効果を与えるのかを探る。

2.研究の概要

(1)シーニックバイウェイHOKKAIDOの概要

シーニックバイウェイ (Scenic Byway) とは、景色 (Scene) の形容詞シーニック (Scenic) とわ

*キーワード: 意識調査分析、景観、観光

**正会員、工博、筑波大学大学院システム情報工学研究科 (茨城県つくば市天王台1-1-1、TEL & FAX : 029-853-5591)

***非会員、学士(社会工学)、東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻 (東京都目黒区駒場4-6-1)

****正会員、博士(工学)、筑波大学大学院システム情報工学研究科

き道を意味するバイウェイ (Byway) を組み合わせた言葉である。ドライブ観光のニーズが高く旅の途中で出会うふれあいなどが大切されている米国において、1989年にシーニックバイウェイ法が制定され、景観・歴史などに関して優れている価値を保存し、合衆国内の景観の長期的維持と充実が図られている²⁾。具体的には、シーニックバイウェイとしてルートを指定し、各ルートにおいて沿道景観の保全、景観や自然景観の保全・活用、体験メニューの創出などを、地域住民が主体となって運営している。我国ではドライブ観光のニーズが高く豊かな自然環境に恵まれている北海道において、国土交通省が中心となりSBH制度の導入が進められた。

SBHのモデル事業においては千歳～ニセコと旭川～占冠の2つがルートとして指定された。同事業の参加主体はモデル検討委員会、行政機関 (国土交通省北海道開発局・北海道各建設部・市町村など)、リソースセンター (アドバイザーの役割・コーディネータの役割を担う機関として設置)、主に以前から活動を行ってきた地域活動団体 (NPO法人・公益法人・任意団体・市民団体など合計38団体) となっている。これまでは主体別や地域別に行ってきたみちづくりやまちづくりを主体間や地域間で連携して取り組んでいることがSBHの特徴である。

(2)本研究の視点

まちづくりや景観形成における問題の多くは、短期的・個人的には利益になることが長期的・社会的には不利益となってしまうという社会的ジレンマ構造を持つ。そこでは、問題の重要性が認識されにくい、あるいは重要であることはわかっているが解決のための行動には繋がりにくくなることから、問題の解決が難しくなっている。そこで、人の意識に働きかけ問題の重要性を認識させる、あるいは行動し

ようという気持ち（行動意図）を持たせることが問題の解決に繋がると考えられる。また、ジレンマ問題の解決には「人々の協調行動を活発にすることによって社会の効率性を改善できる、信頼、規範、ネットワークといった社会組織の特徴」といわれる Social Capital（以下SC）の蓄積が役に立つといわれている³⁾。

そこで本研究においては、SBHへの参加による地域住民の重要性の認識向上・行動意図の形成、SCの蓄積可能性とSC蓄積によるジレンマ問題解決の可能性を探る。

(3) 調査・分析の進め方

SBHへの参加による地域住民の意識変化を把握・計測するためヒアリング調査・アンケート調査を行った。まず、現地訪問・SBHのホームページ・メーリングリスト投稿内容等から情報収集を行った。次にこれらを踏まえて、行政関係者・アドバイザー・コーディネータ・参加団体メンバー（以下「メンバー」）にヒアリングを行った。そして、ヒアリング調査の成果をもとにアンケート調査票を作成し、メンバーと一般住民への調査の実施により、地域住民の意識と意識変化を計測した。一般住民においてはSBHの認知と関連行事への参加経験の有無を把握した。

調査の結果から、まずメンバーの参加前の意識と一般住民の意識を把握・比較する。次に関連行事に参加経験のある一般住民（以下「参加一般住民」）の参加による意識変化とメンバーの参加による意識変化を把握・比較する。メンバーに関しては意識変化の構造を探る。

3. 調査の実施

(1) ヒアリング調査とその内容

行政関係者とリソースセンターの人達は、メンバーと接する中で、メンバーの意識や態度の変化を感じたり直接メンバーからの発言に接したりする機会が多い。そこでまず、行政関係者とリソースセンターの人達にヒアリングを行った。その上でメンバーへのヒアリングを行った。それぞれのヒアリングから得られた情報を整理し、行政に対する意識・

態度、まちづくりや景観に関する意識・態度、他の団体や他の地域との関わりの3つに分類した。詳細は表1と表2に示す。

表1. 行政関係者・リソースセンターへのヒアリング内容

項目	具体的内容	評価主体		
		行政	コーディネータ	アドバイザー
	行政が話をきいてくれる主体であるという認識の構築			
	文句ではなく行政と対等に意見交換できる関係の構築			
	行政に対する理解を示す			
	行政への親しみを感している			
	行政不信の軽減、解消			
	行政のところを気軽に訪ねるようになった			
	重要性の再認識			
	自分がやるべきであるという意欲向上			
	団体間や地域間など横の繋がりがうまれた			
	他の団体と同じ目標をもった			

表2. 参加団体メンバーへのヒアリング内容

項目	具体的内容
	行政に対して意見を言える関係が構築できた
	行政に対し身近に感じるようになった
	行政に対する信頼感が変わった
	今までやりたいと思っていたことができると思った
	今までずっとやらなければいけないと思っていた
	実際にやってみたらできたという経験によってやる気が増した
	今まで気にしていなかった、景観を気にするようになり、色々なものが見えるようになった
	他の地域でも頑張っているのを見て、自分達も頑張らなければという気持ちが生まれた。
	やりたいという気持ちを再確認した
	自分の地域にゴミが落ちてるとはずかしいと思うようになった
	個別にやっていたはだめで、一つにならなければいけないという危機感が生まれた
	シーニックパイウェイという同じ枠組みで、大きな目的が同じであるからこそ、他の団体の人を信頼して一緒に何かをできる
	様々な人との繋がりができた
	他の団体と一緒に勉強して、交流が深まって、一緒に何かをやるとういうことになった

(2) アンケート調査

a) 調査票の設計

メンバーと一般住民に対するアンケート調査における意識に関する質問項目は次の2種類とする。

[] まちづくりや景観に関する意識（(1)の ）
 [] SCの要素に関する項目（(1)の と を含む）
 具体的な質問項目は、ヒアリングで得られた情報を一般的な言葉に置き換えて設定する。例えば、の内容は「行政に対する信頼感」と「行政を身近に感じる気持ち」の2つの項目に置き換える。[]は社

会的ジレンマ構造という視点から、重要性の認識を問う項目(4項目)と行動意図を表す項目(3項目)を設定する。[]は と にSCの要素として重要である地域への愛着と仲間への信頼を加える。[]と []に加え、個人属性、SBHとの関わり、人とのコミュニケーションの機会の程度、まちづくり・景観に触れる機会について問う項目を設定する。回答方法は機会と意識は1(小さい)~4(大きい)の4段階評価、意識変化は1(小さくなった)~5(大きくなった)の5段階評価とした。

b)調査の実施

メンバーについては、本格導入に向けた制度設計のために行われたアンケート調査企画に筆者らが参加し、全活動団体を対象として調査を実施した(配布数:152、回収数:118、回収率:78%)。一般住民については、モデルルート内の旭川市西神楽地区の住民を対象とし、当該地区で活動しているメンバーの協力を得て、ランダムサンプリングによる家庭訪問調査を実施(2004年12月7日~10日)した(配布数:242、回収数:238、回収率:98%)。

4. SBHの効果の分析

(1)コミュニケーション、まちづくり・景観に触れる機会

SBHへの参加によって何が得られているのかを把握するために、人とのコミュニケーションやまちづくりや景観に関することに触れる機会がどれくらいあるかという質問に対する回答結果を一般住民、参加一般住民、メンバーに分けて平均をとった。この結果から、SBHへの参加によって、他の地域の人や行政の人など日常生活においては触れることが少ない人とのコミュニケーションの機会、まちづくりや景観に触れる機会が得られていると考えられる。

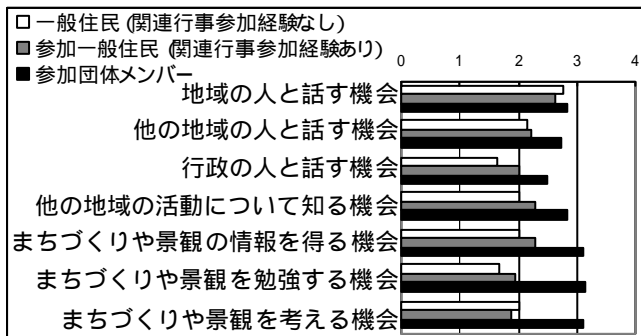
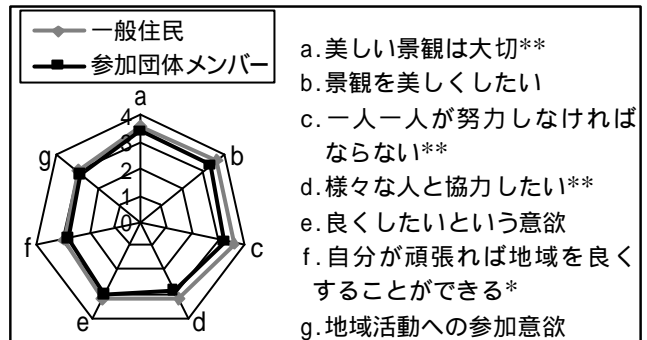


図1. コミュニケーションやまちづくり・景観に触れる機会

(2)まちづくりや景観に関する意識と意識変化

a)参加前の意識

3(2)の[]に関しては、図2に示す重要性の認識(a~d)と行動意図(e~f)を表す質問項目を設定した。回答者について平均値をとった結果からは、行動意図が重要性の認識に比べ小さくなっていることがわかる。一般住民の重要性の認識はメンバーより有意に大きい一方で、行動意図は1項目を除き有意差がない。このことから一般住民は実際に団体に所属し活動に参加しているメンバーと比べ、行動意図が重要性の認識に伴っていないと考えられる。



t検定の結果: **1%水準, *5%水準でグループ間に有意差有り
図2. 一般住民とメンバーのまちづくりや景観に関する意識

b)参加による意識変化

意識変化に関する回答結果は1から5の5段階評価を-2~+2に換算し図3に示す。両グループにおいて意識の向上がみられるが、t検定を行った結果全項目においてグループ間における有意差はない。関係一般住民は数回の関連行事への参加による変化、メンバーにおいては2年間の経験を通しての変化であるため、この結果からすぐには変化の差がないとは言えない。しかし、メンバーとしての参加だけではなく、メンバーが開催する行事へ一般住民が参加することにより、一般住民の意識が向上しているのが見られる。

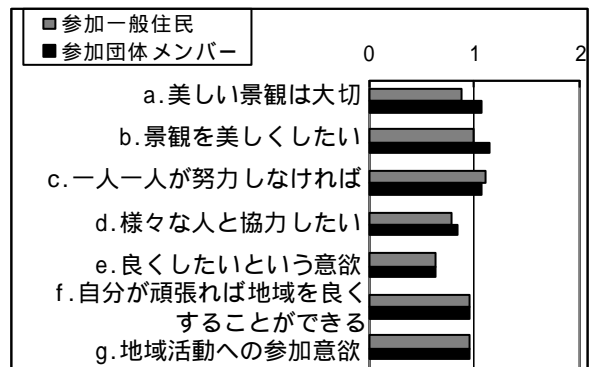
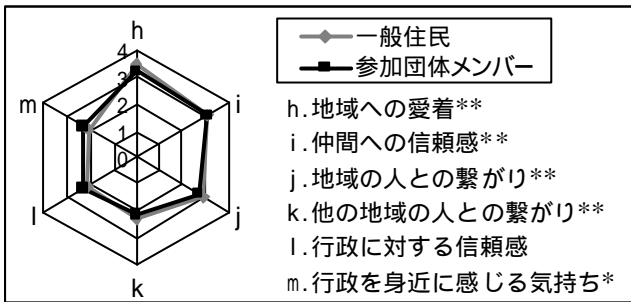


図3. 参加一般住民と参加団体メンバーのまちづくりや景観に関する意識変化

(2) Social Capitalの蓄積と蓄積変化

a) 参加前のSocial Capitalの蓄積

3(2)の[]に関しては図3に示すようなh~mをSCの蓄積を表す質問項目として設定した。回答者について平均値をとった結果から、仲間など身近な範囲(h~j)よりも行政など身近ではない範囲(k~l)におけるSCの蓄積が小さくなっていることがわかる。両者には日常生活において接する機会の差があるためと考えられる。

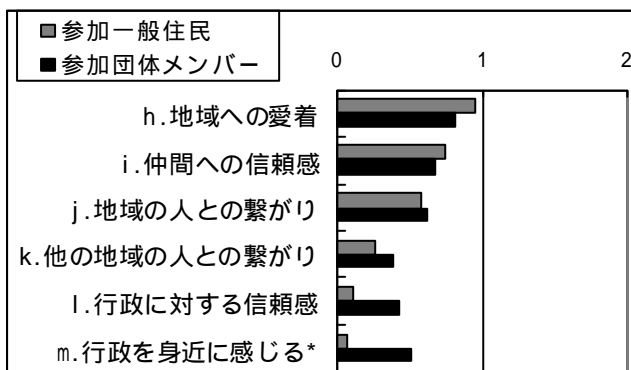


t検定の結果：**1%水準，*5%水準でグループ間に有意差有り

図4. 一般住民と参加団体メンバーのSC蓄積

b) 参加によるSocial Capitalの蓄積変化

参加一般住民においては、地域から行政というように身近ではなくなるにつれて変化が小さくなり、行政を身近に感じる気持ちに関してはほとんど変化がない。一方でメンバーにおいては、身近な範囲に比べると小さいものの、行政に対する信頼感なども向上していることがわかる。これは、メンバーがSBHへの参加によってこれまで身近ではなかった人と接する機会を得ていることによると考えられる。



t検定の結果：*5%水準でグループ間に有意差有り

図5. 参加一般住民と参加団体メンバーのSC蓄積変化

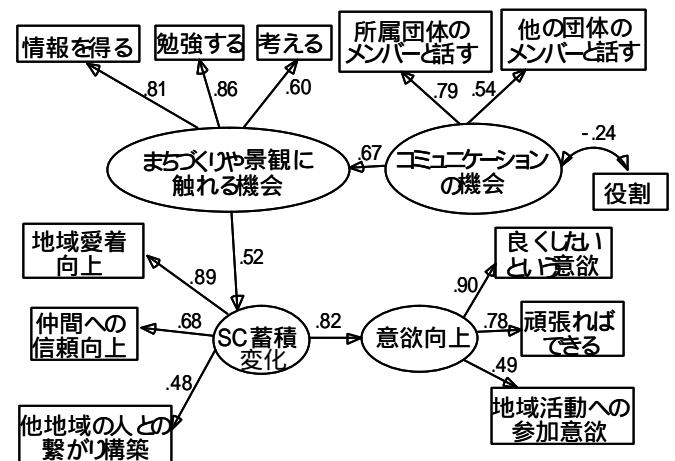
(3) 参加団体メンバーの意識変化の構造

意識変化の構造を探るため、メンバーに絞り共分散構造モデルを作成した。アンケート調査で計測した項目を観測変数とし、潜在変数としてコミュニケーションの機会、まちづくりや景観に触れる機会、

SC蓄積変化、意欲向上の4つを設定した。適合度指標から当てはまりは良く、係数もt検定の結果全て有意となっている。

まず、SBHへの参加によってコミュニケーションの機会を得る。この機会をどれくらい得るかは役割と関係がある。役割は小さいほど中心的に活動をしている人であり、中心的に活動している人ほど積極的に人とのコミュニケーションの機会を得ていると考えられる。人とのコミュニケーションの機会を多く持った人ほどまちづくりや景観に関する情報を得たり考えたりする機会が多くなる。そして、まちづくりや景観に触れる機会が多いほどSCの蓄積が大きくなり、そこから意欲の向上につながる。このことから、SBHに参加して人とのコミュニケーションの機会を得ることが最終的に意欲向上につながると考えられる。SCの蓄積には、地域の課題を発見するといった活動が役立つといわれており、まちづくりや景観に触れる機会はそれに当たるといえる。一般に、SCの蓄積がジレンマ問題の解決に繋がると言われているが、その可能性もここで示唆される。

(1)から(3)の結果から、SBHの取り組みには、意欲向上のための要素やSC蓄積のための要素が取り入れられていると考えられる。



$\chi^2=62.4(P=0.131)$ 、GFI=0.904、RMSEA=0.048

図6. 参加団体メンバーの意識変化の構造

参考文献

- 1) シーニックバイウエイHOKKAIDOホームページ：
<http://www.scenicbyway.jp/>
- 2) 社団法人 北海道開発技術センター： 米国 Scenic Byway Program に関する研究(1)，技術資料 Vol.0023，2003
- 3) 内閣府国民生活局： ソーシャルキャピタル - 豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて，独立行政法人国立印刷局，2003